



1969-1975

# ひとりひとは上手かった？ チームカラー無しのノンポリ実力集団



## あの頃は強かったに なぜか登場する32期

佃先生の「あの頃は強かったなあ」の言葉に登場するのは、初めて全国大会に出場した29期、本多や山本のいた41期などいくつか数えることができるが、その中になぜか「32期？ そうそうあれも強かった」という言葉が登場する。中3時代の戦績は秋の県大会で3位、高2では総体県予選で天敵神戸高校に負けて2位といえば、「まあまあかな」とも思うが、当時は自分自身決して強いとは思っていなかったし、その思いは他のメンバーもそうだろう。

しかし決して弱いとは思っていなかった。いや「おれたちは決して弱くなんかない」と思っていたからこそ、先生も少しだけ認めるそれなりの活躍もしたし、自分たちが残した戦績に対していまだに満足していないのかもしれない。

### 時代の変革期に生きた32期

32期が六甲を過ごした時代は高度成長の真っ只中、社会が急速に様変わりしていく時代だった。勉強にしても、数ⅡBにベクトルなんか無かったいわゆる旧課程の最後の学年となったし、もうすぐ国立2期校がなくなる予定が発表されたし、佃先生にしてもひたすら恐れられていたのが、みんなが「どうしたんや」と疑心暗鬼にかられる

ほどのやさしい一面を少しずつ見せはじめるようになったし。

そしてサッカーも、そのスタイルを変えつつあった。まずフォーメーション。中学時代はダブルユーエム(WM)といって、今の選手なら「はっ？ それいったい何のことですか？フォーメーション？ほんまですか」と言われてしまいそうなフォワードが5人もいる形だったのが、高校時代になると「やっぱり4：3：3やで」「えっ、それ前から？それとも後ろから？」なんて具合に変わった。

しかし、最も変わったのはそれではない。それは「パワーから技術」への転換だ。我々以前のサッカーのスタイルは、一言で言えばパワーサッカー。良く言えば、ダイナミックで大きなサッカーなのだが、とにかく大きく蹴ったり、ひたすら根性でボールを追ったりするのだ。

ひとつ先輩の31期に我々32期の一部が加わったチームがそうだった。とにかくバックスが強力で、ボカチンと大きく蹴った球を今はアル中？当時は天才センターフォワードの宮本さんが得点にするのだ。31期は、これで近畿大会優勝という偉業を成し遂げた。もちろんパワーだけでなく上手かったが。

しかし、私は個人的にはこのサッカーあまり好きでなかった。理由その1は、私自

身があまりパワフルではなかったこと。理由その2は、ひたすら根性の前に、「まてよ、もっと楽な方法は無いものだろうか」と考えてしまう性格だったから。そして最大の理由は、かっこよくないことだ。悪く言えば原始人の突撃みたいで、あれじゃ女にモテないような気がした。

翌年、我々32期が最学年となった33期との合同チームでは、パワーサッカーを捨てた。しかし現実には、パワーサッカーを捨てたというよりも捨てるを得なかったという方が妥当かもしれない。我々のキック力は31期と比べると数段劣っており、さらに33期ときたらひどいもので、まるで幽霊の火の玉のようにゆらゆら風になびく球しか蹴れないのである。ということで我がチームでは、一旦攻め込まれたらなかなかハーフラインまで蹴り戻すことのできない事態をなんとかテクニックでカバーすることが不可欠だったのだ。そのテクニックのサッカーだって、パワーサッカーではないからそう言ったまでのような程度で、要は個人技に頼りながら、ゴチャゴチャ手間暇かけてチマチマと進んでいくのだ。

しかし、そんな頼りないチームであったが、当時は県内でも有力チームだった。不思議なことだが……

### 前も後ろも上手かったから

#### 32期もそれなりの活躍

「32期は強かった」あるいはそう言われるのは、もちろん32期自身の実力がそこそこあったこともあるが、前の31期と後ろの33期が上手かったからなのだ。今もそうだと思うが、当時は1学年でひとつのチームを作ることなく考えられず、必ず上または下の学年との合同チームなのだ。

そう言えば29期ごろから強かった。29期ごろから、パワーのみのサッカーに加えて考えるサッカーが他校に比べると出来た六甲は、サッカーのスタイルが変わりつつあった転換期にあって、県下でも有数のチームとして活躍しそれは34期ごろまで続いた。いわば昭和40年代のサッカー部黄金時代だ。

そんな中で32期は、比較的レベルの高い先輩や後輩に恵まれて、サッカーをすることができたのだ。ありがたい。そして本当に今考えても楽しかった。ホント。

### ひとりひとりがしっかり、それが信条

32期の部員数は、中学時代こそ多かったが、最後まで残ったのは7名。だから単独

でのチームカラーは全くといっていいほど無かった。というよりも典型的な個人個人の集まりの学年だった。もちろんサッカーはいっしょにするのだが、他の学年で見られるような、休日集まって遊んだりすることはほとんど皆無だった。逆に、いつもいっしょに行動して、時々チームの団結がどうのこうのと、まるで当時夕方4時ごろに再放送していた『ナントカ青春』みたいなことやっていた学年を、内心「アホクサッ、そんなことする暇あるなら練習せよ」とバカにしていた。だからといって、仲が悪かったわけではなく、いざサッカーとなるとお互いをきっちりと認め合い信頼し合っていたし、あ、うんの呼吸も他学年以上であったと思う。

そんな関係のメンバーだったからこそ、お互いのキズをなめあうような甘えもなく、そこそこの成績を残すことができたのだと思う。そんな関係だから、そこそこの成績止まりだったんだということも言えるけれど……。

でも私は、そんなクールで冷静な32期サッカー部が好きだったし、皆もそんな自分たちに誇りを持っていたに違いない。



部員紹介：個性バラバラ、ミニ野武士たち

#### 関 浩之

32期のキャプテン。名スーパードとして、中高6年間県下に名を馳せていた。普通中学の頃からこれだけ上手いと、野球では4番が必ずピッチャーをやるように、センターフォワードなのだが、なぜか最初から最後までボックスだった。きっと本人はずっと不満だったに違いない。でも私は断言する。君はボックスがいい。ボックスとしては超一流だけど、フォワードとしてはただのハズシだ。大事な時にあんなにペナルティキックはずしたじゃない。

#### 広瀬 寿秀

セービングはちょっと不細工だったけれど、神がかり的なカン、というより普通の人間の常識では考えられないポジショニングでチームの危機を何度となく、本当に何度となく救った。でも私は知ってる。彼は別にキーパーをやるつもりで入部したのではなかったことを。中1の夏合宿で、「お前、キーパーやってみ」と言われたその日の夕方、沈んでいた彼の姿を私は見てた。

#### 荒川 彰

32期部員のココロ支柱的存在。とにかく6年間学年1番の成績だったのだから。彼がいなかったら、学校のサッカー部や私のような成績の芳しくない部員に対する風あたりはもっと強かっただろう。でもガリ勉タイプでは決してなく、そんなところがスマートで人気も高かった。サッカーについて

は、残念ながらなかなかレギュラーポジションに恵まれなかったが、あれでサッカーもメチャうまだったら、みんな神様を恨んだことだろう。

#### 八木 康行

32期ではめずらしく根性のあるミッドフィールダー。中学の頃、背が小さかったおかげでイジメに巻き込まれていた（イジメてたのは確か堂免だったか。オレ？ オレは第3グラウンドのミゾに押し込めた一度だけ）。でもそんなこんなを押し退けて、高校になってからは一度もイジメられたことなんてなかった。高1の時かな？彼がサッカーやめると言って部活に出てこなくなった。みんなで芦屋の彼の家に行説得しに行ったことを覚えている。

#### 谷口 徳芳

なんといってもヘディングが天才のフォワード。そんな彼が高1の時、まさか酒の飲み過ぎじゃなかったと思うが、肝臓を患って長期間休部した。中学を終え部員数が激減した32期は、それでなくとも瀕死の状態。なんとか彼に復帰してほしいということまで何度か頼んだ。なんとなく復帰してくれそうな感触もあるのだが、ノラリクラリと確約してくれない。そう、あいつはいつもノラリクラリ、シュートを決めた時もポーカーフェイスを装っていた。本当は顔をグチャグチャにして喜びたいに

決まっているのに。

#### 堂免 和正

やや太り気味のわりに運動神経抜群だった。中3の時だったか、弁当箱のおかずの所にごはん、ごはんの所に野菜という涙ぐましいダイエット作戦を取行、ややスリム程度にまで変身した。しかし、生来楽して生きることを信条としたタイプで、サッカーのスタイルもそうだった。オリジナルのフェイントに他校のボックスはよくひっかかっていた。でも、私はひっかからない。生来楽して生きるタイプの彼が、最終的にはこの局面をどうしたいのかが読めるから。

#### 大谷 薫平

左利きということで珍重された。はっきり言って左利きは得だ。その頃リベリーノとか左利きの名プレイヤーがワールドカップで活躍してたこともあり、「大谷は左利きなんですよ」と聞かされると、「ほう、そーなんですか」と、それだけで器用で上手い感じがしたものだ。6年間ペナルティキックの係りだったが、一度もはずしたことはないのが自慢。しかし背筋が弱かったのか、ヘディングとスローインはからっきしだった。

[大谷 薫平]